

リチャード・ドーキンス著『神は妄想である——宗教との決別』

「心にのこる1冊」 『科学』2008年7月号 pp.797-8

「あのドーキンスが なぜここまで むきになるのか？」帯に大きな黒文字。三段で。出版社の一種〈照れ〉が目に見えるような。批判対象が霊視や念力ならまだしも神って……場違いにならぬようタイトル変える？ いや、やはり原題どおり……、自己ツッコミ風の疑問符に苦慮の跡が伺える。

日本では国家神道は記憶のかなた、カルトの暴走すら歴史的一幕、伝統宗教がテロや蒙昧主義の元凶になるとはまず思われていない。信仰も淡泊だ。アイルランド問題や公教育の創造論復興に揺れるキリスト教圏ならインパクトもあろう神批判、わざわざ翻訳で読まされる意義って？ 苦笑した読者も多いのではなからうか。

しかし私にはよくわかる。宗教団体の信者だった経験があるからだ。大学入試直前に突如入院する羽目になり、結局浪人が決まったとき、中学時代の恩師に誘われたのである。信者数公称30万、神道ベースの折衷的新興宗教だった。「この先生が薦めるのなら」と親に入会金を払ってもらい、月例会や諸行事に参加した。

しかしすぐ醒めた。カルトっぽさは薄く穏健な教団だったが、「疑えば地獄に墮ちる、二股かければ地獄に墮ちる、因果を断つには勧誘せよ、人を救えば自身の救われ方も増す」……恫喝によって洗脳されどどんどん愚かになってゆく信者らを間近に見て、うんざりしてきた。老人と若い女性ばかりの地区勉強会で浮いていたせいもあり、3年ほど辛抱したのち脱会した。

支部長だった恩師とは縁が切れた。脱会と同時に年賀状の返事もくれなくなった。盲信が知性と情緒をいかに蝕むかを直接観察できたのは収穫だったが、人生論を熱く語ってくれた良き恩師を奪われた恨みはまだ忘れていない。

という経緯で宗教を憎む心なら誰にも負けない私、舌鋒相変わらぬドーキンス節による宗教批判を読みながら、「そうそう、日本にもこういう本を必要とする人はたくさんいる。政治問題化しないぶん、一神教国よりいっそう深刻なのだ……」かつての信者仲間の顔を痛ましく思い浮かべながら頷きまくったのだった。

この本が私を感動させたのは、しかし宗教批判そのものではなく、むしろ科学論の部分だった。インテリジェントデザイン説を批判する中でドーキンスが「人間原理」を解説した第4章、これが圧巻なのである。

人間原理の論理構造はこうだ。私たちのこの宇宙（惑星）の他に、物理定数（環境）の異なる無数の宇宙（惑星）が実在するとせよ。その中で、人間の意識のような複雑系を生んだ宇宙（惑星）は稀な例外で、その種の宇宙（惑星）だけが知的生命によって観測される。このバイアスを無視して、身近な「定数（環境）」を普遍化することはできない……。

これは裏返せば、この宇宙は人間の進化にとって特別に好都合にできている、とも読める。多宇宙から結果的に観測選択されただけ、という論理を忘れて表面だけ見ると、人間原理は「宇宙は人間を生むべく定められていた」などという目的論のトンデモ学説になってしまう。実際、人間原理を目的論風に宣伝したり批判したりする勘違い啓蒙書が巷にあ

ふれている。

人間原理の哲学的含蓄を十数年来研究し、精一杯布教してきた私としては苛立たしい風潮だが、そこへドーキンス版「正しい人間原理解説」が翻訳されたのだ。うれしかった。

ドーキンスは「人間原理＝目的論」系の誤解を正す反面、物理学界での正反対の不評にも切り込んでゆく。人間原理によれば、無目的のランダムな物理定数のうち、観測者の意識にヒットしたローカルな定数群を「記述する」ことしか物理学にはできない。それ以上のこと、たとえば究極法則を一義的に決める数学的必然とか、美しい超対称性とかを突き止めようなんぞは、根拠なき信仰に囚われた妄想なのだ。

正統科学すら宗教と同断に斬り捨てるこの論理にドーキンスは共感する。ほとんどの物理学者に嫌悪されてきた人間原理を美しいと思えるのは「ダーウィンのおかげで私の意識が高められているから」だと豪語する (p.217)。宜なるかな。幅広い諸定数から観測によって「この定数」が選ばれるという多宇宙＋人間原理のロジックは、まさに変異と自然選択で生物進化を説明したダーウィニズムの一応用なのだから。

そう、いつしか物理学と生物学の地位は逆転していたのだ。生物現象を物理で説明するかわりに、意識の進化が物理環境を制約するというふうには、生物進化論が物理学のパラダイムとなりつつあるのだ。分野としての先進性と科学界制覇の趨勢を、生物学者がなぜもっと自慢しないのか、不思議なくらいである。

という疑問とともに、身も蓋もない神論議がもしかしてドーキンスシンパの間にすら不興を買っていたりして……と気になったので、まずは無神論者で長年のドーキンスウォッチャーを自認する佐倉統さんに感想を尋ねてみた。すると悪い予感がなにげに的中というか――

佐倉さん曰く、この本はダメ。昔の切れ味なし。御都合主義。神の存在を否定しながら人間原理を主張するのは矛盾ではないか。人間原理がよいなら神原理を認めたってよかろうに。

うーむ……。人間原理の意味が生物学界に正しくフィードバックしているかどうか不安になった次第だが、佐倉さんのような正統ダーウィニストが否定的印象を持った最たる理由を察するに、ドーキンスが漸進説を放棄してしまったように見えることではなかろうか。

たとえば p.210 近辺。真核細胞や意識の出現は、統計的にありえない大きなギャップかもしれないが、無数の惑星での生物進化には幸運な飛躍によりギャップが埋められた進化もあり、それが起きた場所だけが「私たちの惑星」となりうる。この仕組みは生物学的適応とは別ものだ。人間原理で正当化されるべきそうした「隙間」は、他にいくつもあったかもしれない。ドーキンスはそこまで認めているのである。

蓋然的な適応と微小変化で済ませずに、隙間の一挙充填に頼るあたり、神学臭を嗅ぎとって警戒する向きもあろう。論理的にはデザイン説と正反対の、真っ当なバイアス補正論にすぎないのだが……。進化学者が自らの嫡子たる人間原理に抵抗を覚えるとしたらなにゆえなのか、いずれゆっくり教わる折を期待したいと思う。

21世紀科学革命の主役となること確実の「人間原理」を先物買いしてきた私としては、まがりなりにも支持者漸増の風潮は大きな励み。昨年末に出した『多宇宙と輪廻転生』（青土社）でも、人間原理の地位向上の証しとしてこのドーキンス本に嬉々言い及んだものだ。

ところで、人間原理を真に意味あらしめるには、「多宇宙」が必要である。でも多宇宙

なんて、途方もない思弁なのでは？ そんなもの検証できるのか？ 心配御無用。宇宙論と素粒子論の両面、すなわちインフレーション理論とひも理論の進展（ひも理論の場合は挫折というべきか）により、多宇宙の存在はますます定説化しつつある。そのあたりの事情は、Bernard Carr 編『Universe or Multiverse?』（Cambridge U. P., 2007 年）に第一線物理学者らの寄せた論文がいきいきと伝えてくれます。